

報道発表



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

令和7年9月30日

令和6年度（2024年度）「全国学生調査（第4回試行実施）」の結果について

文部科学省では、中央教育審議会答申で提言された全国的な学生調査の実施について、令和6年（2024年）10月28日（月）～令和7年（2025年）3月7日（金）の間、国立教育政策研究所と共同で、全国の大学生を対象とした大規模なアンケート調査を試行実施し、13万人を超える多くの学生から回答をいただきました。

今般、その結果を取りまとめましたので公表します。

1. 趣旨目的

「全国学生調査」は、「学修者本位の教育への転換」を目指す取組の一環として、全国共通の質問項目により、学生目線から大学教育や学びの実態を把握し、大学の教育改善や国の政策立案など、大学・国の双方において様々な用途に活用することを目的としている。

本調査は、令和元年度（2019年度）の第1回、令和3年度（2021年度）の第2回、令和4年度（2022年度）の第3回試行実施に引き続き、適切な調査方法や質問項目などを整理・検証するため、試行という位置付けで実施したものである。

2. 調査内容

（1）調査対象

試行実施に参加意向のあった540大学^{※1}に在籍する学部2年生（約49万人）及び4年生等^{※2}（約51万人）、並びに参加意向のあった短期大学132校^{※1}に在籍する2年生以上^{※2}（約1.8万人）。

^{※1} 試行実施では、調査方法や質問項目などを整理・検証し、全国学生調査の制度設計の確立を目的とすることから、全大学（787大学）に対して試行実施へ参加協力の可否等について意向確認を実施し、68.6%の大学から参加意向の回答があった。同様に全短期大学（297校）にも意向確認を実施し、44.4%の短期大学から参加意向の回答があった。

^{※2} 各大学・短期大学の標準修業年限における最終学年の学生を対象とした。

（2）調査方法

参加校が以下の調査方法①～②から選択

- ①文部科学省が実施するインターネット（WEB）調査（文部科学省が指定するURLに学生が直接回答）
- ②参加校が実施する学生調査（参加校独自の学生調査の中に本調査の質問項目を設定）

(3) 質問項目

大学で受けた授業の状況、大学での経験とその有用さ、大学教育を通じて知識や能力が身に付いたか、平均的な1週間の生活時間等、全33問

(その他、自由記述(任意) 1問)

3. 回答状況

(1) 全体の回答状況

対象	対象校数	対象学部数 ※短大においては 学科数	対象学生数		有効回答者数		回答率
			2年生	4年生以上	2年生	4年生以上	
大学	540校	2,324学部※2	489,378	513,163	69,030 (14.1%)	62,277 (12.1%)	13.1%
うち基準※1 合致	304校 (56.3%)	811学部※2 (34.9%)	215,198 (44.0%)	224,119 (43.7%)	56,351 (81.6%)	51,085 (82.0%)	24.5%
短期大学	132校	248学科	17,647		6,713		38.0%
うち基準※1 合致	61校 (46.2%)	106学科 (42.7%)	6,789 (38.5%)		5,252 (78.2%)		77.4%
合計	672校	2,572 学部・学科※2	1,020,188		138,020		13.5%
うち基準※1 合致	365校 (54.3%)	917学部 ・学科※2 (35.7%)	466,106 (45.7%)		112,688 (81.6%)		24.2%

(参考：第3回試行実施結果)

大学	532校	2,083学部	462,252	488,595	51,502 (11.1%)	49,570 (10.1%)	10.6%
うち基準※1 合致	279校 (52.4%)	660学部 (31.7%)	201,323 (43.6%)	216,481 (44.3%)	37,708 (73.2%)	36,757 (74.2%)	17.8%
短期大学	148校	294学科	24,376		6,805		27.9%
うち基準※1 合致	60校 (40.5%)	93学科 (31.6%)	7,502 (30.8%)		4,758 (69.9%)		63.4%
合計	680校	2,377 学部・学科	975,223		107,877		11.1%
うち基準※1 合致	339校 (49.9%)	753学部 ・学科 (31.7%)	425,306 (43.6%)		79,223 (73.4%)		18.6%

※1 学部単位で「対象学生数が、①60人以上80人未満のとき、有効回答者数30人以上、②80人以上200人未満のとき、有効回答者数40人以上、③200人以上600人未満のとき、有効回答者数50人以上、④600人以上のとき、有効回答者数60人以上、⑤60人未満のとき、有効回答率50%以上」を集計基準として設定。

※2 学部の中に複数の分野が含まれる場合は、それぞれの分野を重複して計上

<集計基準について>

本調査の集計基準は、各大学・短期大学の学部・学科の回答としての代表性が損なわれないよう設定したものである。そのため、全体・設置者別・学年別の回答状況については学生から得られた全ての回答を集計に含めることとした。一方で、学部規模別・学部分野別の回答状況については、集計基準に合致した学部・学科の回答のみを集計した。(全体の回答状況以外のデータについては別添の資料編に示す。)

※本基準は、学部・学科の規模が60人未満の場合、50%の有効回答率を必要としたため、小規模の学部・学科が基準を満たせず、別添資料編に示したデータについてはこうした学部・学科の特徴が反映されていない可能性がある。

(2) 大学の回答状況

<設置者*別の回答状況>

区分	対象大学数	対象学部数	対象学生数	有効回答者数	有効回答率
国立	82大学	504学部	214,891人	32,572人	15.2%
公立	70大学	206学部	56,920人	8,860人	15.6%
私立	388大学	1,614学部	730,730人	89,875人	12.3%

※人数については、学部2年生と最終学年の在籍者数の合計

<大学規模*別の回答状況>

大学規模	対象大学数	対象学生数	有効回答者数	有効回答率
2,000人以上	161校	733,605人	78,239人	10.7%
2,000人未満 1,000人以上	96校	137,408人	23,296人	17.0%
1,000人未満 500人以上	112校	81,118人	16,079人	19.8%
500人未満	171校	50,410人	13,693人	27.2%

※人数については、学部2年生と最終学年の在籍者数の合計

<学部規模^{*}別の回答状況>

学部規模	対象学部数	対象学生数	有効回答者数	有効回答率
800人以上	298学部	394,193人	33,056人	8.4%
800人未満 400人以上	576学部	326,802人	44,787人	13.7%
400人未満	1,450学部	281,546人	53,464人	19.0%

*人数については、学部2年生と最終学年の在籍者数の合計

<有効回答率別の大学数・学部数>

有効回答率	対象大学数
80%以上	22大学
60%以上80%未満	25大学
40%以上60%未満	37大学
20%以上40%未満	101大学
10%以上20%未満	133大学
10%未満	222大学

有効回答率	対象学部数
80%以上	78学部
60%以上80%未満	70学部
40%以上60%未満	130学部
20%以上40%未満	362学部
10%以上20%未満	437学部
10%未満	1,247学部

(3) 短期大学の回答状況

<設置者^{*}別の回答状況>

区分	対象校数	対象学科数	対象学生数	有効回答者数	有効回答率
国立	—	—	—	—	—
公立	9校	22学科	1,676人	399人	23.8%
私立	123校	226学科	15,971人	6,314人	39.5%

※人数については、最終学年の在籍者数の合計

<短期大学規模^{*}別の回答状況>

短大規模	対象校数	対象学生数	有効回答者数	有効回答率
400人以上	4校	1,790人	583人	32.6%
400人未満 200人以上	18校	4,217人	1,118人	26.5%
200人未満 100人以上	58校	8,202人	3,456人	42.1%
100人未満	52校	3,438人	1,556人	45.3%

※人数については、最終学年の在籍者数の合計

※短期大学においては、規模が小さく、有効回答者数が少ないとから、短期大学規模別のみ作成した。

<有効回答率別の短期大学数>

有効回答率	対象校数
80%以上	27校
60%以上80%未満	19校
40%以上60%未満	15校
20%以上40%未満	20校
20%未満	51校

(4) 調査方法別の回答状況

対象	調査方法	対象校数	対象学部数 ※短大においては 学科数	対象学生数 ※短大においては最終学年のみ		有効回答者数 ※短大においては最終学年のみ		回答率
				2年生	4年生以上	2年生	4年生以上	
大学	①	486校	2,078学部	445,424	466,743	53,776 (12.1%)	46,021 (9.9%)	10.9%
	②	54校	246学部	43,954	46,420	15,254 (34.7%)	16,256 (35.0%)	34.9%
短期大学	①	120校	220学科	15,714		5,407		34.4%
	②	12校	28学科	1,933		1,306		67.6%

※調査方法①：文部科学省が実施するインターネット（ＷＥＢ）調査（文部科学省が指定するＵＲＬに学生が直接回答）

調査方法②：参加大学が実施する学生調査（大学独自の学生調査の中に本調査の質問項目を設定）

4. 質問項目ごとの回答内容

<各質問項目の回答選択割合>

(注1) 回答選択の実数については、別添「令和6年度「全国学生調査（第4回試行実施）」結果【資料編】」（以下、本資料において「別添資料編」と記載）参照

(注2) 各回答の割合は、小数点第三位で四捨五入した上でパーセント表示しており、複数の回答の割合を合算した数値は、各回答のパーセント表示の和と必ずしも一致しない。

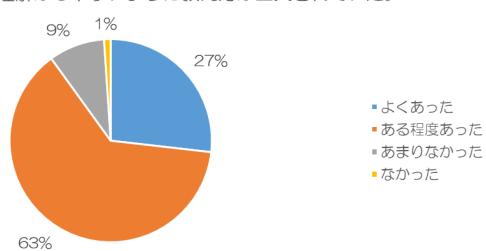
【大学】

問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか。

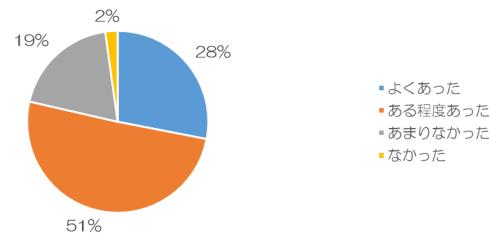
理解がしやすいような教え方の工夫（90%）、授業時間外に行うべき学習の指示（79%）等については、「よくあった」、「ある程度あった」という割合が高かった。

適切なコメントが付された提出物の返却（54%）、ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導（56%）については半数程度であった。

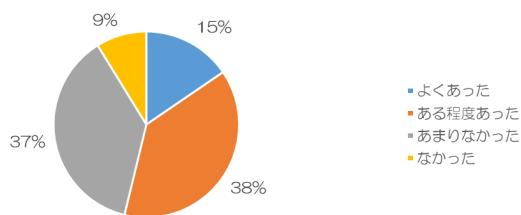
Q4：理解がしやすいように教え方が工夫されていた。



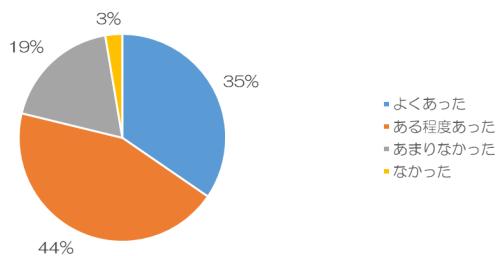
Q5：予習・復習など授業時間外に行うべき学習が指示される。



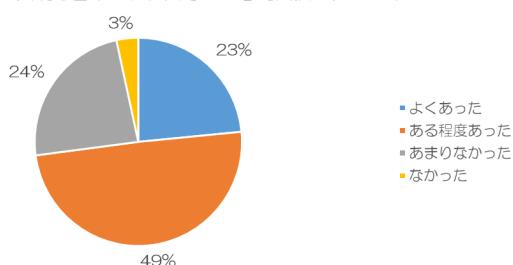
Q6：課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される。



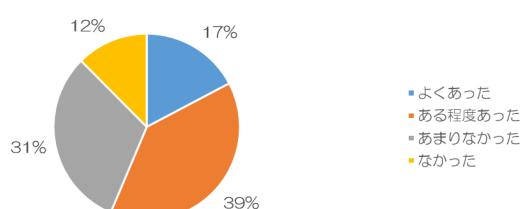
Q7：グループワークやディスカッションの機会がある。



Q8：質疑応答など、教員等との意見交換の機会がある。



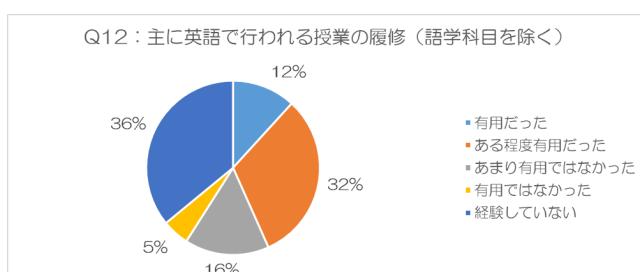
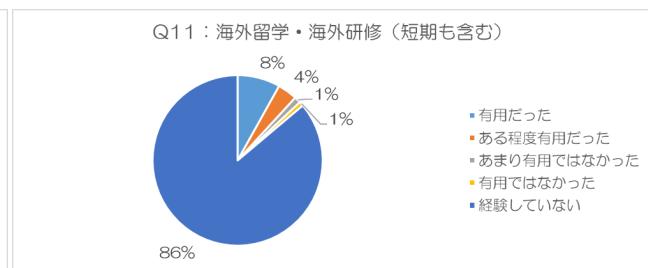
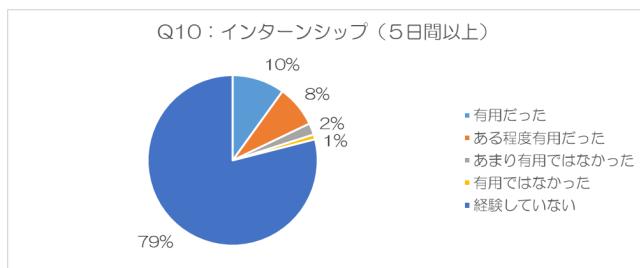
Q9：ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある。



問2 大学在学中に経験した以下の項目はどの程度有用だったと感じますか。

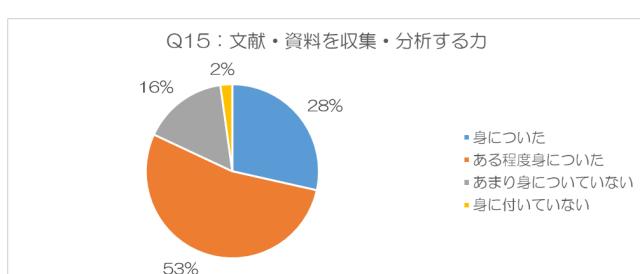
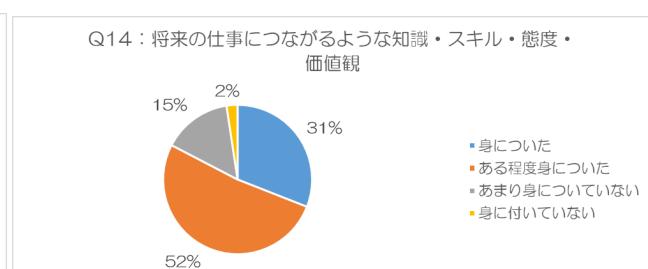
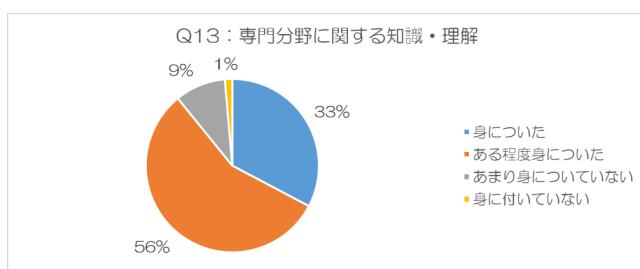
主に英語で行われる授業の履修については、6割以上が経験したことがあります、経験したことがある学生の約7割が「有用だった」、「ある程度有用だった」と回答した。

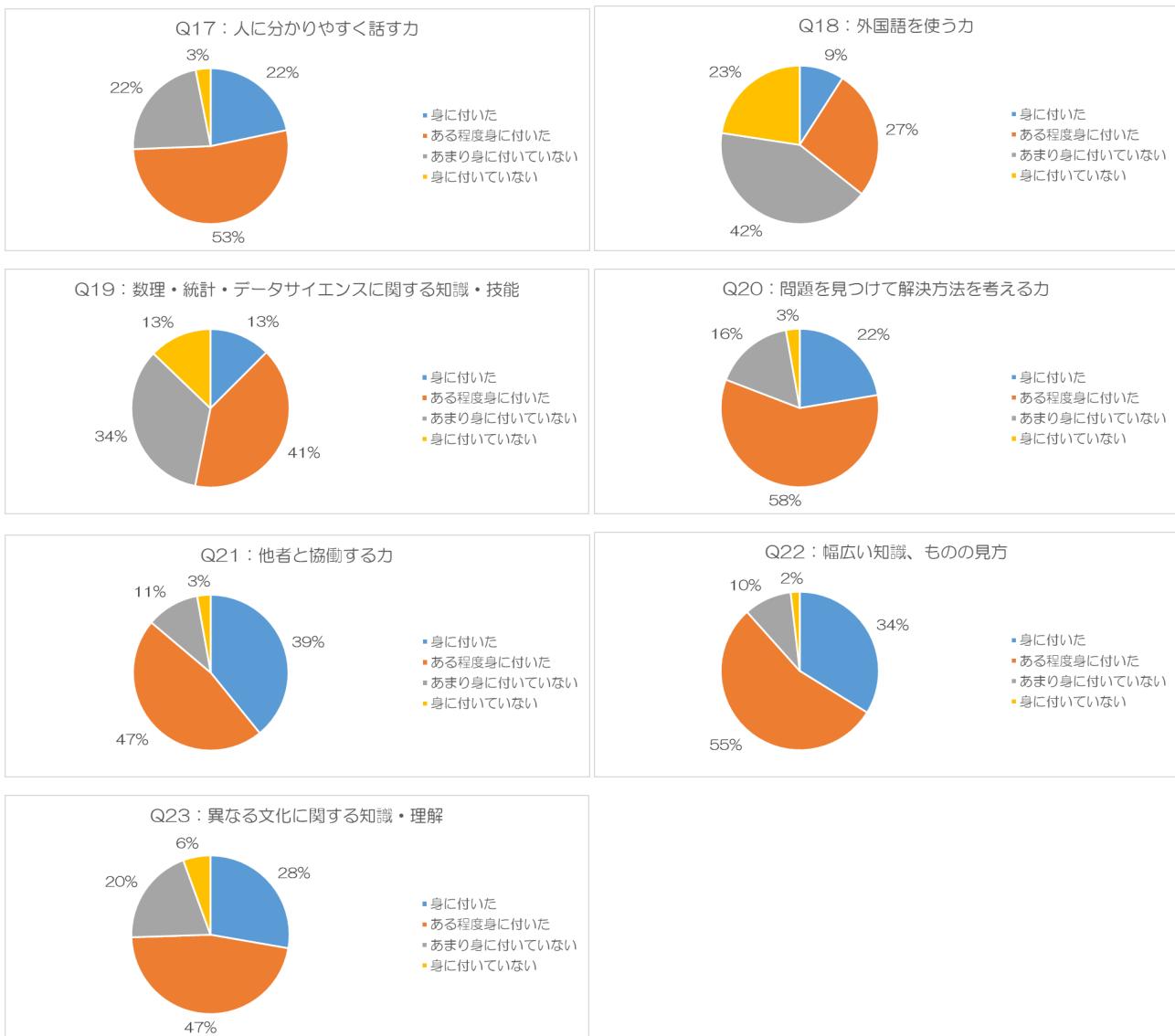
インターンシップ（5日間以上）（79%）や、海外留学・海外研修（86%）では、「経験していない」という割合が高かった。



問3 大学教育を通じて、次のような知識や能力などが身に付いたと思いますか。

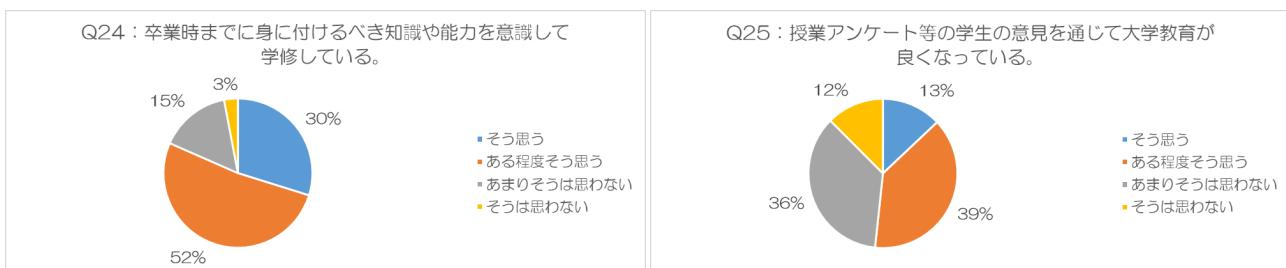
専門分野に関する知識・理解（89%）、幅広い知識、ものの見方（88%）、他者と協働する力（86%）等について、「身に付いた」、「ある程度身に付いた」という割合が高かったが、外国語を使う力（36%）については割合が低く、数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能（53%）については半数程度であった。

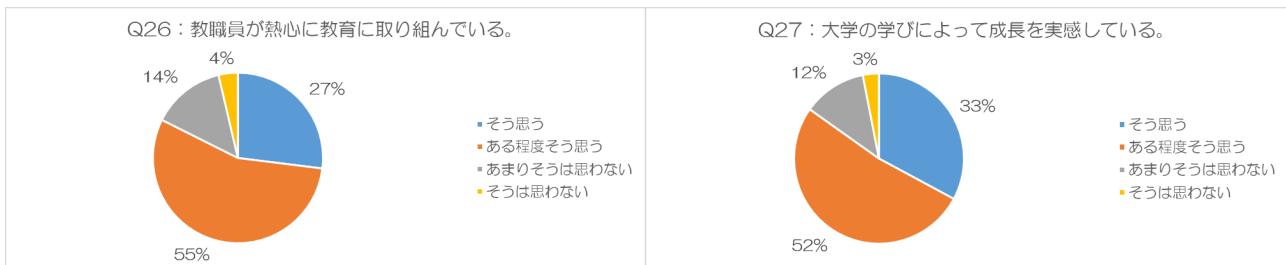




問4 これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか。

大学での学びによって成長を実感している（85%）、卒業時までに身に付けるべき知識や能力を意識して学修している（82%）、教職員が熱心に教育に取り組んでいる（82%）について、「そう思う」、「ある程度そう思う」という割合が高かったが、授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている（52%）については半数程度となつた。

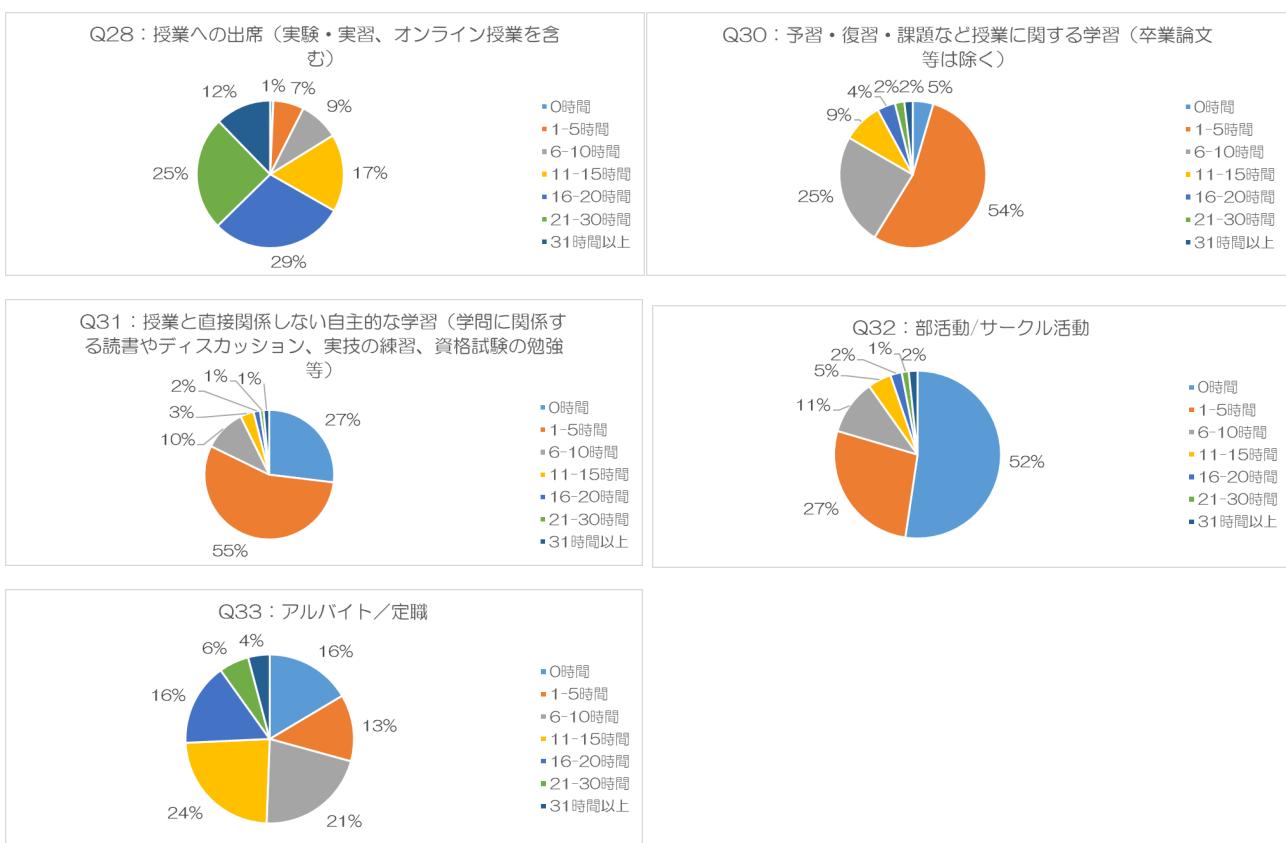




問5 今年度後期の授業期間中の平均的な1週間（7日間）の生活時間は、それぞれどのくらいですか。

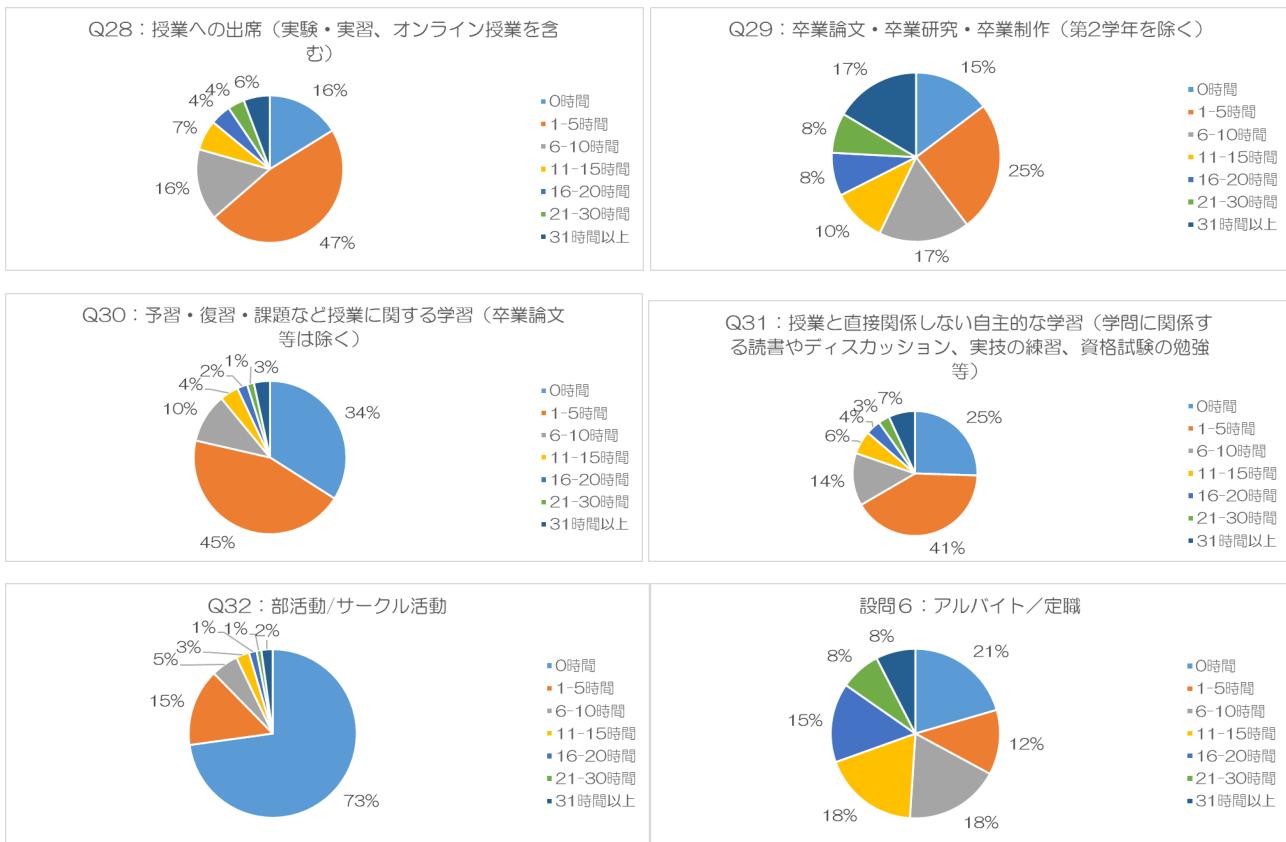
授業への出席は2年生で16時間以上が67%、4年生以上で5時間以下が64%。卒業論文等は4年生以上で16時間以上が32%。授業に関する学習は5時間以下が2年生で59%、4年生以上で79%。授業と直接関係しない自主的な学習は5時間以下が2年生で82%、4年生以上で66%。部活動／サークル活動は2年生で0時間が52%、4年生で0時間が73%。アルバイト等は2年生と4年生でともに11時間以上が約半数。¹

◆2年生（設問2を除く）

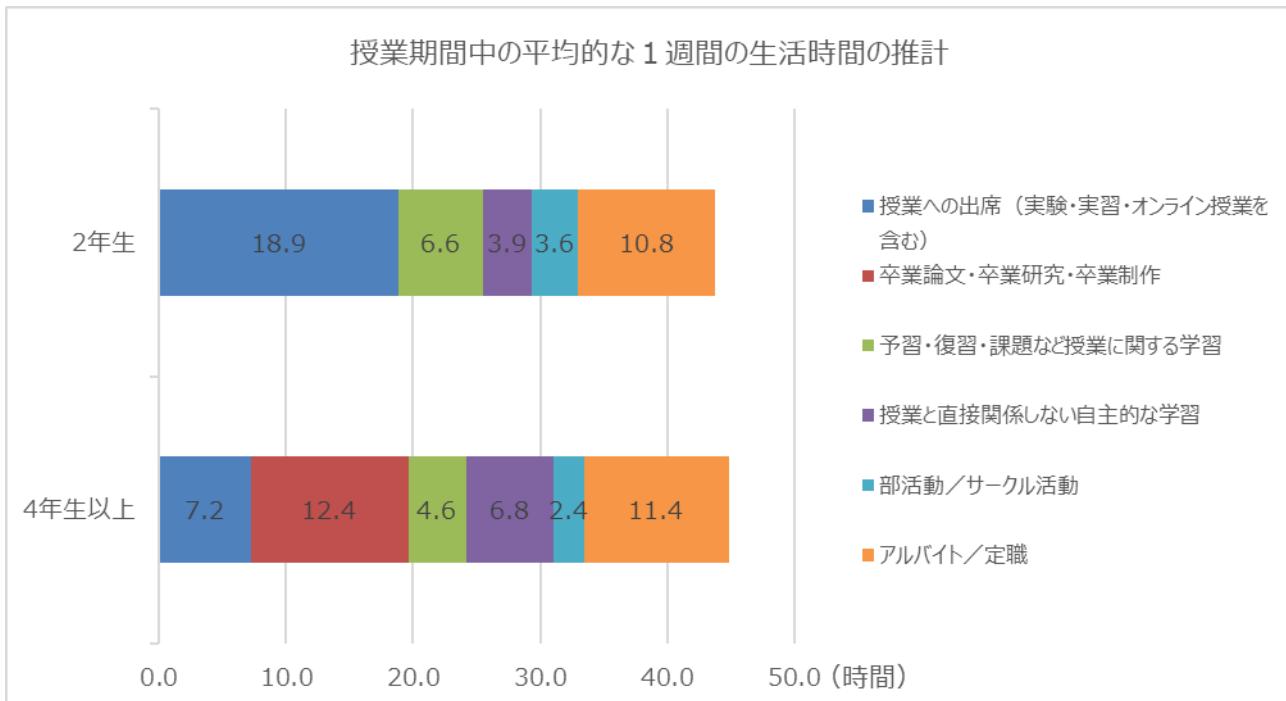


¹ 問5は、学年で回答の傾向が異なる場合があるため、学年別のデータを掲載している（その他の学年別データは別添資料編に掲載）。なお、【Q29】「卒業論文・卒業研究・卒業制作」については、最終学年のみの設問である。

◆ 4年生以上



(参考) 授業期間中の平均的な1週間の生活時間の推計



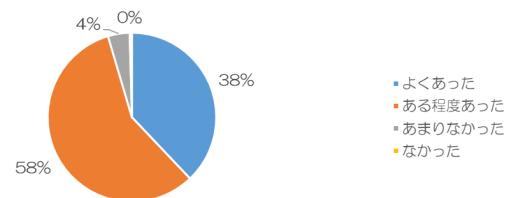
※各選択肢の中央値（ただし、31時間以上は33時間）に、各選択肢の割合を乗じたものを合算し平均時間を算出。

【短期大学】

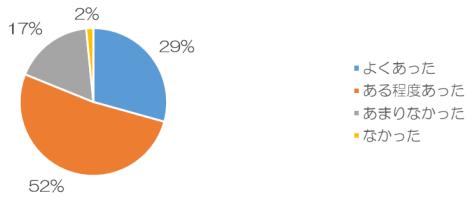
問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどれくらいありましたか。

理解がしやすいような教え方の工夫（95%）、グループワークやディスカッションの機会（91%）等、全体的に「よくあった」、「ある程度あった」という回答割合が高かった。

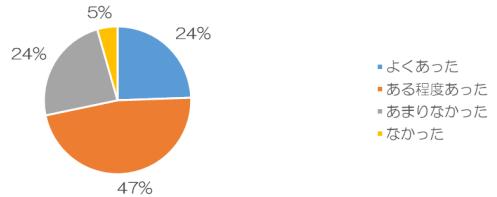
Q4：理解がしやすいように教え方が工夫されていた。



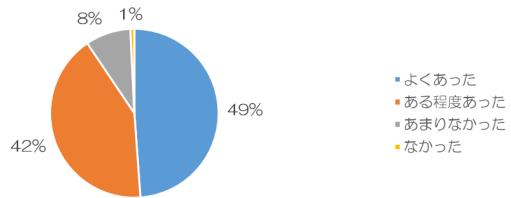
Q5：予習・復習など授業時間外に行うべき学習が指示される。



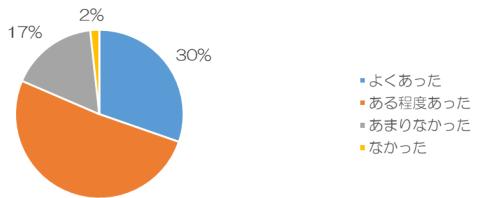
Q6：課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される。



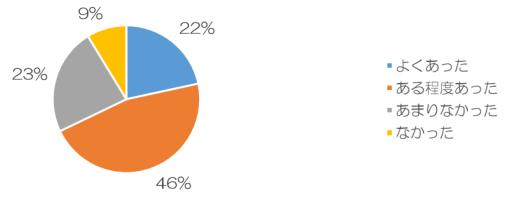
Q7：グループワークやディスカッションの機会がある。



Q8：質疑応答など、教員等との意見交換の機会がある。



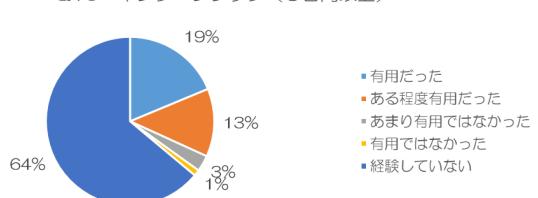
Q9：ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある。



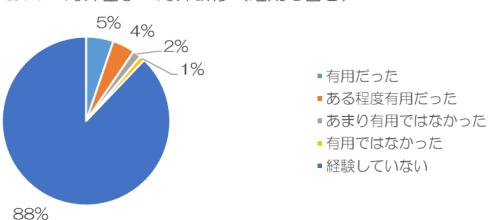
問2 大学在学中に経験した以下の項目はどの程度有用だったと感じますか。

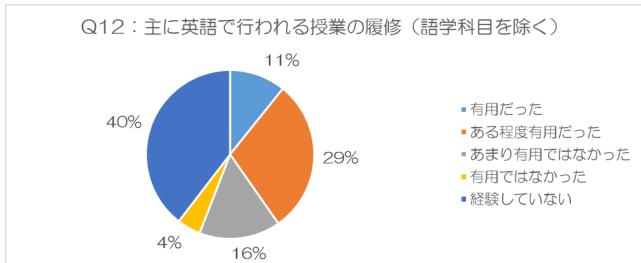
主に英語で行われる授業の履修については、約6割が経験したことがあります、経験した学生の約7割が「有用だった」、「ある程度有用だった」と回答した。海外留学・海外研修（88%）、インターンシップ（64%）では「経験していない」という割合が高かった。

Q10：インターンシップ（5日間以上）



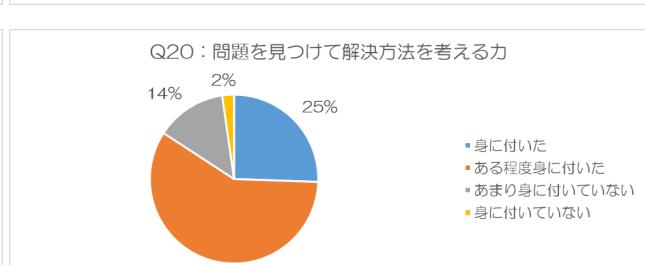
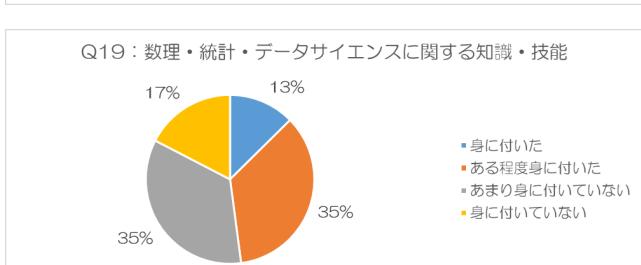
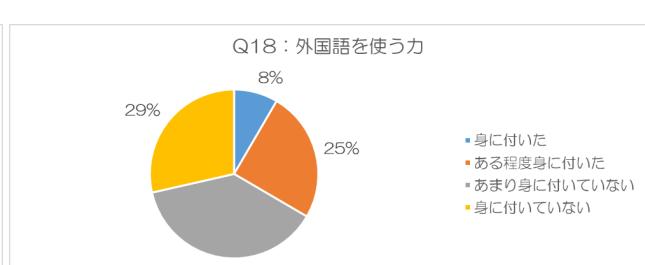
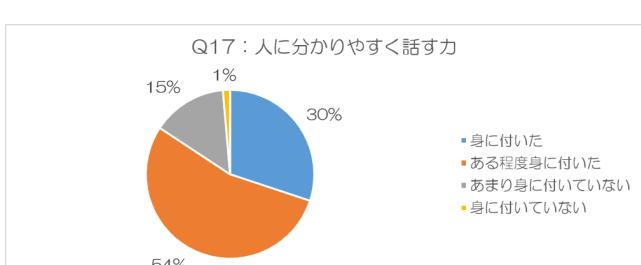
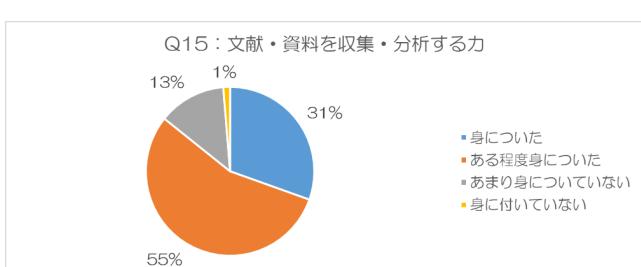
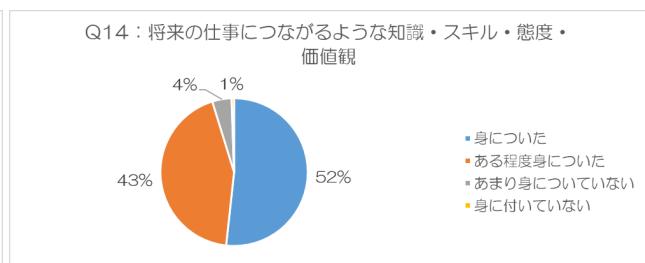
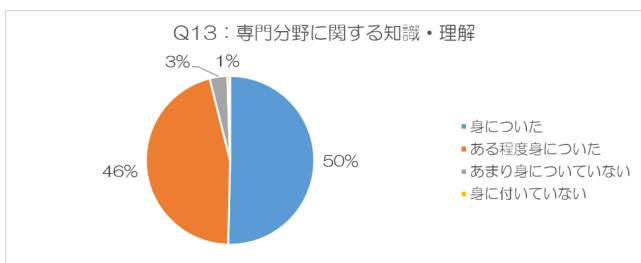
Q11：海外留学・海外研修（短期も含む）

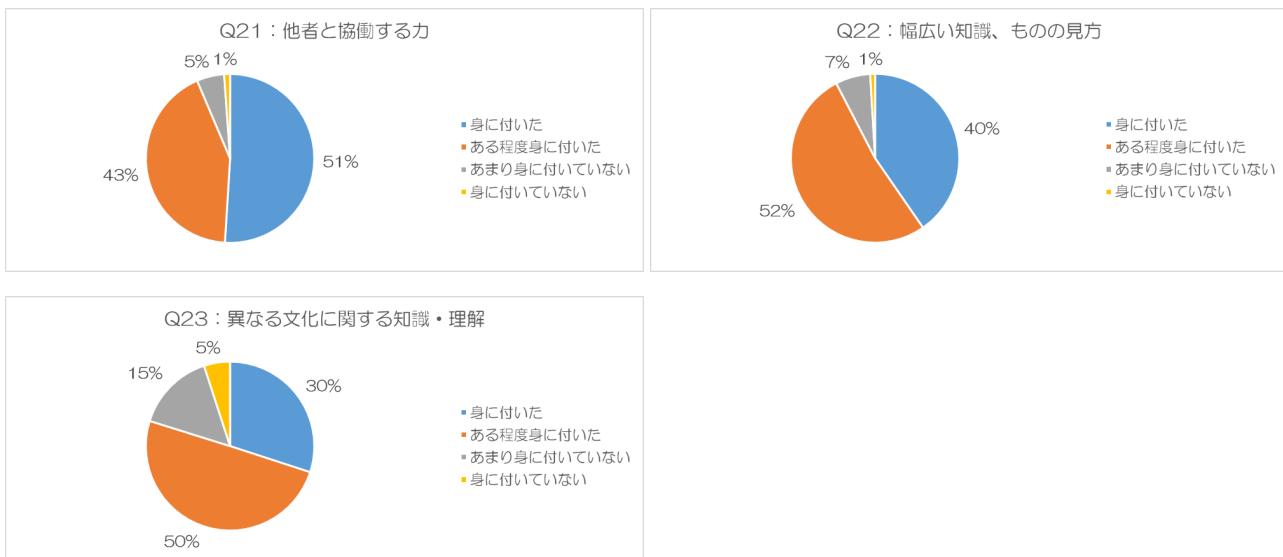




問3 大学教育を通じて、次のような知識や能力が身に付いたと思いますか。

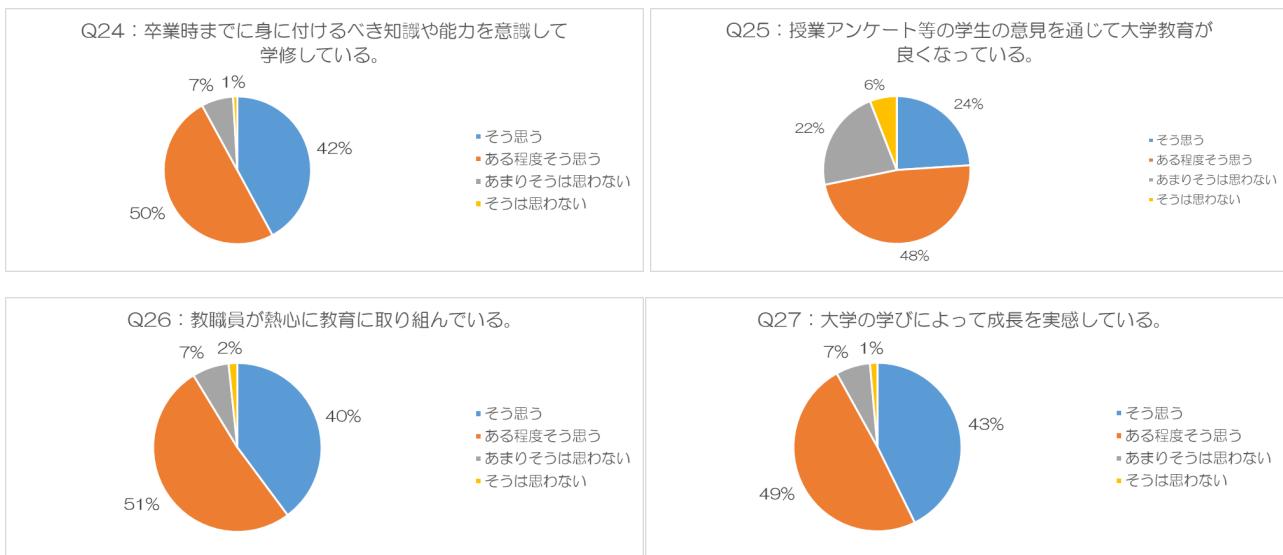
専門分野に関する知識・理解（96%）、将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観（95%）、他者と協働する力（94%）等については、「身に付いた」、「ある程度身に付いた」という割合が高かったが、外国語を使う力（33%）については割合が低く、数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能（48%）については、半数程度であった。





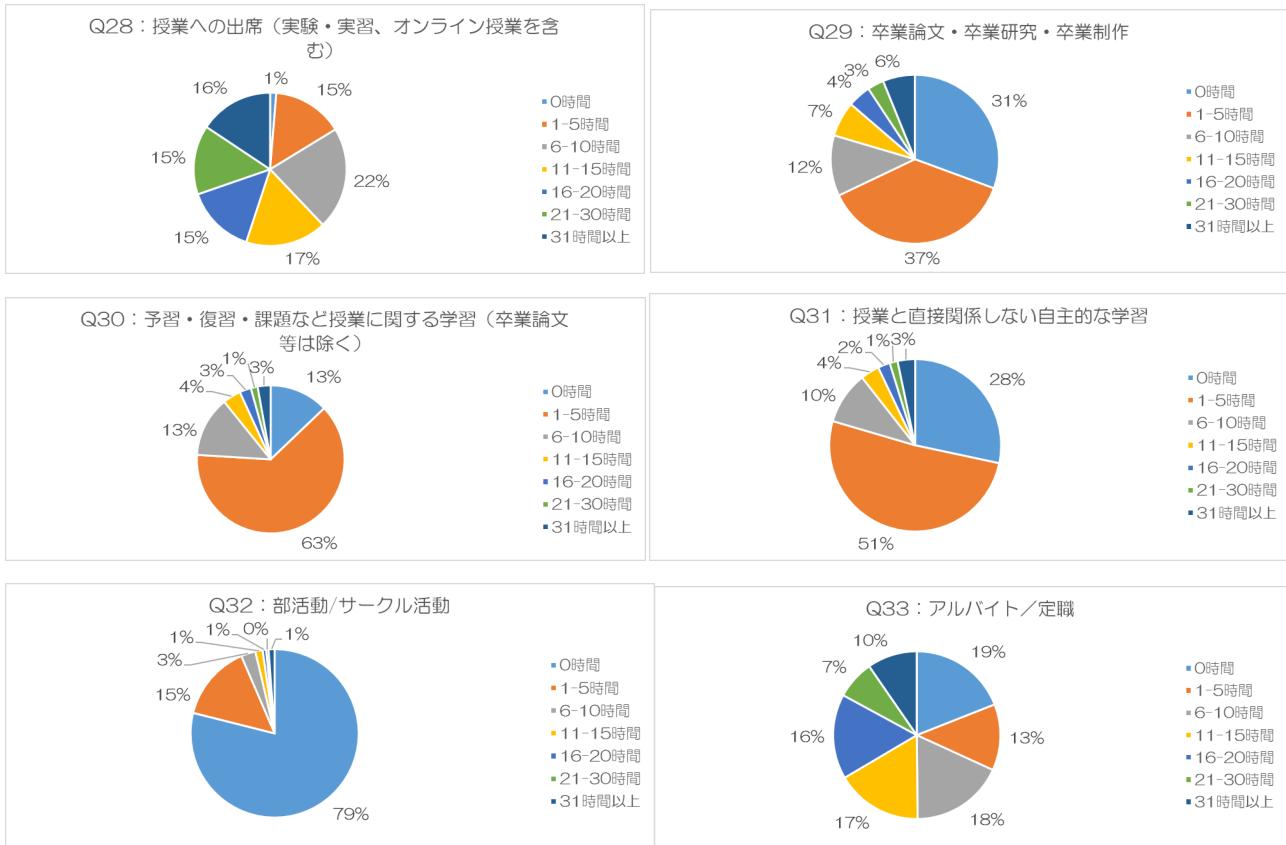
問4 これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか。

卒業時までに身に付けるべき知識や能力を意識して学修している（92%）、大学での学びによって成長を実感している（92%）、教職員が熱心に教育に取り組んでいる（91%）については、「そう思う」、「ある程度そう思う」という割合が特に高く、他の項目についても比較的高い割合となった。

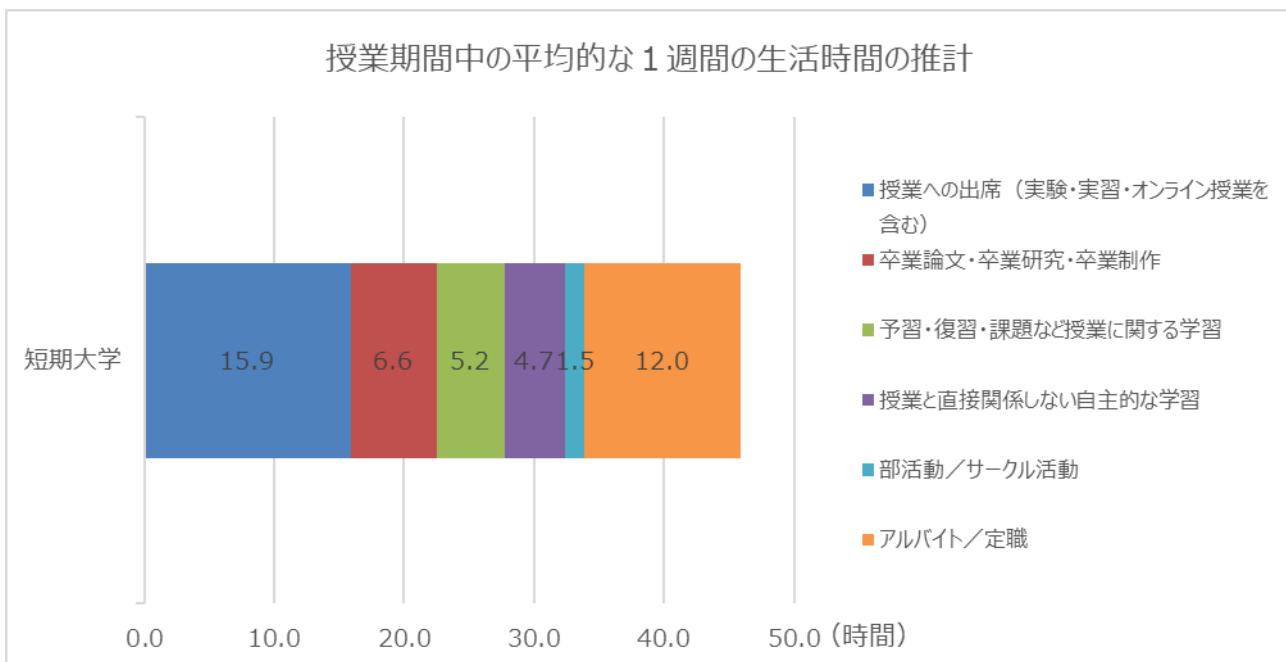


問5 今年度後期の授業期間中の平均的な1週間（7日間）の生活時間は、それぞれどのくらいですか。

授業への出席は16時間以上が45%、5時間以下が16%。卒業論文等は16時間以上が14%。授業に関する学習は5時間以下が76%。授業以外の学習は5時間以下が80%。部活動／サークル活動は0時間が79%。アルバイト等は11時間以上が50%。



(参考) 授業期間中の平均的な1週間の生活時間の推計



全体的な結果の整理に加え、各大学・短期大学における把握・分析に資するよう、以下の項目について集計を行い、別添資料編にまとめた。

- 設置者別の回答状況
- 学部・学科規模別の回答状況（集計基準合致学部）
- 学部・学科分野別の回答状況（集計基準合致学部）
- 学年別の回答状況（大学のみ）
- 設置者別と学部等規模別の回答状況の組み合わせ（集計基準合致学部）

5. 結果を踏まえた課題等

(1) 調査対象・時期・回答率について

今回調査は、大学・短期大学での学修経験や身に付いた能力に関する学生の自己認識を確認する観点から、第2回、第3回試行実施と同様、大学2年及び修業年限の最終学年の大学生並びに最終学年の短期大学生を対象に調査を実施した。また、調査実施時期は、10月下旬から3月上旬までの期間から各大学・短期大学が1か月程度の期間を選んで実施した。

回答率は、大学は13.1%、短期大学は38.0%となり、それぞれ前回調査（大学は10.6%、短期大学は27.9%）を上回る結果となった。回答率が前回調査より向上した要因については、調査時期の変更、質問項目の精査、後述の回答方法の追加などの影響が考えられる。しかしながら、本格実施に向けては、前述の項目の影響を分析するなど、有識者の意見も踏まえながら更なる回答率向上の方策を検討する必要がある。

(2) 回答方法について

今回調査については、前回調査と同様のインターネット（WEB）調査（調査方法①）に加え、参加校が実施する学生調査（参加校独自の学生調査の中に本調査の質問項目を設定）（調査方法②）を各大学・短期大学が選択する調査方法で実施した。調査方法②を選択した参加校の回答率は、大学は34.9%、短期大学は67.6%であり、調査方法①の回答率（大学は10.9%、短期大学は34.4%）を上回った。また、回答者数は、前回の107,877人から約3万人増の138,020人となり、回答率は11.1%から13.5%となつたことから、回答者数の増加及び回答率向上の効果があったと考える。

(3) 質問項目について

前回調査では質問数は45問だったが、学生の回答負担、回答率に及ぼす影響等も踏まえて、質問数を33間に精査するとともに、また、学生にわかりやすい簡潔な文言に修正した。

(4) 各項目の回答状況について

《大学》

【Q6】「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」

「あまりなかった」又は「なかった」と回答した割合は46%と約半数であった。この項目については、自由記述においても「課題を提出したがフィードバックがなく、どこまで理解できているのか、何が間違っているのかがわからなかつた」等の意見が散見されたが、学生が教員等から適切なフィードバックを受けられないことは、学修の成果を学修者が実感できる「学修者本位の教育」の実現という観点からも課題であると考えられる。

【Q18】「外国語を使う力」

「あまり身に付いていない」又は「身に付いていない」と回答した割合が64%であ

った。多くの大学において外国語が必修科目とされている中で、半数を超える学生が学修成果を実感できていないことが明らかとなった。

【Q19】「数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能」

この分野は、例えば「統合イノベーション戦略 2025」（令和 7 年 6 月 6 日閣議決定）の中でも「「数理・データサイエンス・AI」に関する素養を備え、社会のあらゆる分野で活躍する人材を大量に育成する」ことが盛り込まれるなど、重視される分野であるが、「あまり身に付いていない」又は「身に付いていない」と回答した割合が 47% と約半数であった。²

【Q25】「授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている」

「あまりそうは思わない」又は「そうは思わない」と回答した割合が 48% であり、約半数の学生は、授業アンケート等が大学教育の改善に生かされているという実感を持てていないことが明らかとなった。

【Q27】「大学での学びによって成長を実感している」

「そう思う」、「ある程度そう思う」と回答した割合は 85% であり、多くの学生は大学教育を経て自らの成長を実感していることが明らかとなった。

【Q28】「授業への出席」 ※実験・実習、オンライン授業を含む

【Q29】「卒業論文・卒業研究・卒業制作」

【Q30】予習・復習・課題など授業に関する学習 ※卒業論文等は除く

大学 2 年生は、授業への出席時間について、約 3 分の 2 の学生が週 16 時間以上、約 4 割の学生が週 21 時間以上であるなど、授業への出席時間が長い一方で、予習・復習・課題など授業に関する学習については週 5 時間以下の学生が約 6 割となっている。これらの結果は前回調査結果と比較しても改善傾向が見られず、引き続き授業への出席時間に比して授業に関する学習時間が短くなっていることが明らかとなった。これは学期末の試験結果のみで単位認定が行われるなどの理由から学生が過剰な単位登録をしており、キャップ制が実質的に機能していないことなどが考えられるが、大学設置基準において 1 単位が 45 時間の学修を必要とする内容をもって構成されることを標準としている単位制度の趣旨に鑑みても大きな課題である。

また、最終学年の学生については、授業への出席時間は 6 割以上の学生が週 5 時間以下となっており、これに伴い、授業に関する学習も週 5 時間以下の学生が約 8 割を占めている。このように最終学年の学生は、授業への出席及び授業に関する学習時間が短い一方で、約 3 割の学生が卒業論文・卒業研究・卒業制作に週 16 時間以上、約 2 割の学生が週 31 時間以上と多くの時間を費やしていることがわかる。しかしながら、最終学年の学生であっても、約 4 割の学生は卒業論文・卒業研究・卒業制作を行う時間が 5 時間以下であり、最終学年においては、学習時間が極めて短い学生も一定数いることが伺える。

² 「数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能」については学部分野別の差異が比較的大きく、理学・工学においては「身に付いた」「ある程度身に付いた」とする回答の割合が高い（別添資料編 53 頁参照）。

こうした状況の背景には、就職活動等による影響や上記で指摘したキャップ制が実質的に機能していないといった課題があるものと考えられる。

《短期大学》

短期大学については、概ね大学と同様の傾向が見られたが、大学と比較して、全体として、短期大学の教育活動、短期大学での学びに対する肯定的な回答の割合が高い傾向にあった。

問1関係では、【Q6】「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」に関する「よくあった」「ある程度あった」は計72%であり、大学より18ポイント高かったほか、【Q7】「グループワークやディスカッションの機会がある」は計91%であり、大学より12ポイント高かった。

問2関係では、【Q10】インターンシップ（5日間以上）を経験したことがある学生が36%（大学21%）と高い割合を示し、経験した学生のうち、88%（大学85%）が肯定的な回答（有用だった、ある程度有用だった）であった。

問3関係では、【Q14】「将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観」が「身に付いた」「ある程度身に付いた」が計95%（大学83%）であり、職業教育の成果が評価されていると捉えることができる。

問4関係でも、全体として、短期大学の学生は、自らの成長や身に付けた知識・技能について、大学の学生と比較してより肯定的に評価していることが明らかになった。また、【Q25】「授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている」では「そう思う」または「ある程度そう思う」と回答した割合は72%と大学よりも20%高く、大学と比較してより学生の意見を踏まえた教学の改善を学生が実感できていることが見てとれる。

問5関係では、【Q30】「予習・復習・課題など授業に関する学習」が5時間以下の学生の割合が76%であり、【Q31】「授業と直接関係しない自主的な学習（学問に関する読書やディスカッション、実技の練習、資格試験の勉強等）」では5時間以下が80%を占め、学習時間の短さは大学と同様に課題であると言える。

《これまでの試行実施との比較》

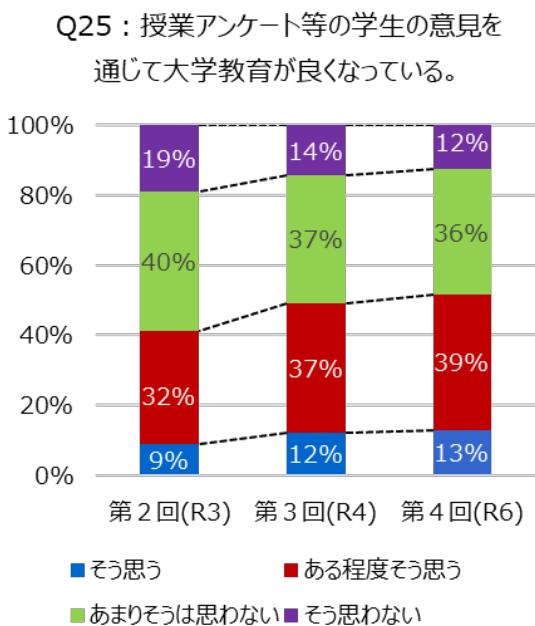
【Q7】「グループワークやディスカッションの機会がある」については、「よくあった」、「ある程度あった」と回答した学生の割合が第2回（令和3年度）、第3回（令和4年度）試行実施と比較して増加した（大学：65%→74%→79%、短大：73%→87%→91%）。

【Q25】授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている。の質問項目について、「そう思う」、「ある程度そう思う」の割合が第2回（令和3年度）、第3回（令和4年度）と比較して増加しており（図1参照）、アンケートを通じた教育の質向上の取り組みが進んでいることが見て取れる。その他、【Q11】海外留学・海外研修（短期留学も含む）を経験した学生の割合（大学は+4%、短大は+2%）、【Q23】異なる文化に関する知識・理解の質問項目について「身に付いた」、「ある程度身に付いた」の割合（大学は+10%、短大は+12%）が前回調査結果よりも高くなった。

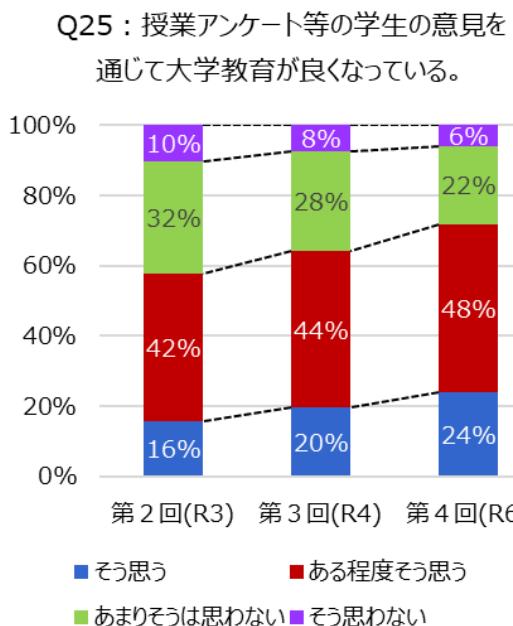
これらに加えて、大学については、【Q14】「将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観」という質問項目について、「身に付いた」、「ある程度身に付いた」の割合が第2回（令和3年度）、第3回（令和4年度）と比較して増加している（76%→80%→83%）³。【Q27】「大学での学びによって成長を実感している」という質問項目について、「そう思う」、「ある程度そう思う」の割合が第2回（令和3年度）、第3回（令和4年度）と比較して増加している⁴（図2参照）。一方で、【Q30】予習・復習・課題など授業に関する学習時間（※卒業論文等は除く）について、週6時間以上の学生の割合が第2回（令和3年度）、第3回（令和4年度）試行実施と比較して減少し、アルバイト、部活・サークル活動の時間が増加しており（図3参照）、新型コロナウィルス感染症の感染拡大期に増加していた学習時間が減少している状況が窺える⁵。

また、短期大学について、【Q6】「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」という質問項目について、「そう思う」、「ある程度そう思う」の割合が第2回（令和3年度）、第3回（令和4年度）と比較して増加している。

(図1：大学)



(図1：短大)



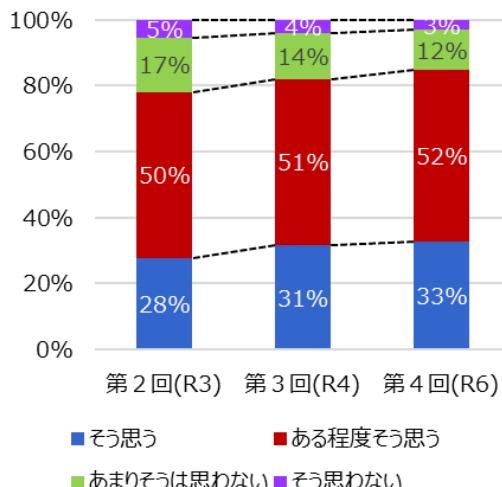
³ 第2回（令和3年度）、第3回（令和4年度）の設問は、「将来の仕事につながるような知識・技能」であった。

⁴ 第2回（令和3年度）、第3回（令和4年度）の設問は、「大学での学びによって自分自身の成長を実感している」であった。

⁵ 単純な比較はできないが、第1回（令和元年度）では、大学3年生の授業（実験・実習含む）への出席が16時間以上の学生は48.5%、予習・復習・課題など授業に関する学習が6時間以上の学生は32.8%、授業以外の学習が6時間以上の学生は26.5%という結果であった。

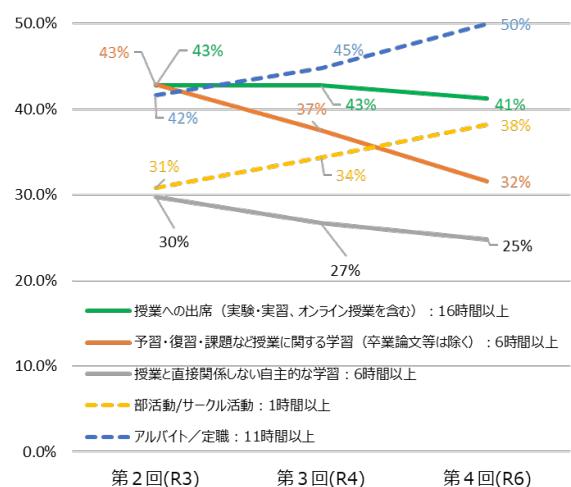
(図2)

Q27：大学の学びによって成長を実感している。



(図3)

Q28、30、31、32、33：学生の1週間の生活時間について
(大学2年生と最終学年の合計)



(5) 調査結果の取扱いについて

今回調査は、適切な調査方法や質問項目などを整理・検証すること目的に、試行という位置付けで実施したため、公表内容は「全国学生調査の実施に関する有識者会議」における検討結果に基づき、全体の回答状況及び学部・学科の回答を設置者別、学部・学科規模別、学部・学科分野別、学年別（短期大学を除く）、設置者別と学部等規模別の組み合わせにより整理したものとした。また、問1～4の各質問項目において肯定的な回答割合が高かった大学・短期大学の学部（学科）ごとに上位順に一覧化したもの（以下、「ポジティブリスト」という。）及びこれらの大学・短期大学の教育方法・教育改善の取組事例を公表した。

また、前回調査と同様、各大学・短期大学において調査結果を教育の改善に活用できるよう自大学・短期大学の回答のみを個別に送付したほか、今後、教学 IR レポートのひな形を提供し、教育改善への活用を促進する。

本格実施では、大学・短期大学単位、学部・学科単位の結果や教学の改善に関する取組を公表することにより、規模や立地、知名度等による入学者選抜の選抜性の高低によらず、教育研究の質の高度化に向けた取り組みについて、国際社会を含む外部から適切な評価を得ていくことを期待する。

(6) 今後の対応

文部科学省としては、大学・短期大学における「学修者本位の教育への転換」をするための施策の検討の参考資料とともに、今回明らかになった調査実施上の課題等を踏まえ、「全国学生調査」の本格実施を進める。

<担当> 高等教育局高等教育企画課高等教育政策室
室長 寺坂 公佑（内線 2473）
課長補佐 花田 大作（内線 3330）
主任 土田 裕美（内線 3332）
電話：03-5253-4111（代表）、03-6734-3332（直通）